F.健康危険情報

該当なし

G.研究発表

1. 論文発表

単行本

伊藤道哉:家族性腫瘍患者のQOLと医療経済,第4回家族性腫瘍カウンセラー養成セミナー講演集,家族性腫瘍研究会,78-80,2001.

濃沼信夫,伊藤道哉:先生,私の治る見込み(医師の治療仮説)はどうですか?,予後を見通す,田村康二編,ハムレットの治療学,永井書店,129-139,2001.

伊藤道哉〔分担執筆〕,日本病院管理学会情報・用語委員会 編:医療・病院管理用語事典〔改訂版〕,エルゼビアサイエンス・ミクス,2001.

雑誌

伊藤道哉:終末期におけるスピリチュアルな領域と宗教ー研究動向をもとにー,緩和医療学;4(1),13-21,2002.

伊藤道哉:新しい遺伝子検査ガイドラインにおける遺伝情報の取り扱い,クレコンレポート;23,1-7,2001.

伊藤道哉 他:QOLに配慮した神経難病の遺伝子診断ガイドライン作成に関する研究,特定疾患患者の生活の質(QOL)の向上に関する研究班平成12年度報告書,2001.

伊藤道哉,関本聖子:人を動かすのは情報 情報を活性化させるのは対話〜宮城県神経難病医療連絡協議会におけるコーディネートの実際〜,ヘルスカウンセリング;4(3),37-45.

伊藤道哉:書評『ヒト・クローン無法地帯』,ナースマネジャー;2(10),4,2000.

伊藤道哉:書評『医療経営白書』,ナースマネジャー;2(11),4,2001.

伊藤道哉:書評『看護記録のゆくえ 「看護記録」から「患者記録」へ』,ナースマネジャー;2(12),4,2001.

伊藤道哉:書評『効果的な情意教育の展開』,ナースマネジャー;3(1),4,2001.

伊藤道哉:書評『人は誰でも間違える』,ナースマネジャー;3(2),4,2001.

伊藤道哉:書評『病院看護の通信簿』,ナースマネジャー;3(3),4,2001.

伊藤道哉:書評『高齢期の健康科学』,ナースマネジャー;3(4),4,2001.

伊藤道哉:書評『導入対話による医事法論議』,ナースマネジャー;3(5),4,2001.

伊藤道哉:書評『僕はやっていない!仙台筋弛緩剤点滴混入事件 守大助勾留日記』,ナースマネジャー;3(6),4,2001.

伊藤道哉:書評『医療・病院管理用語辞典〔改訂版〕』,ナースマネジャー;3(7),4,2001.

伊藤道哉:書評『葉っぱのフレディーいのちの旅』,ナースマネジャー;3(8),4,2001.

伊藤道哉:書評『厚生労働白書 平成13年版』,ナースマネジャー;3(9),4,2001.

伊藤道哉:書評『化学・生物兵器概論ー基礎知識』,ナースマネジャー;3(10),4,2002.

伊藤道哉:書評『コミニュケーション・スキルに関する書籍の紹介』,ナースマネジャー;3(11),4,2002.

2. 学会発表・講演

- 伊藤 道哉,濃沼信夫:QOL向上に資する神経難病遺伝子診断ガイドラインの検討.厚生省特定疾患 特定疾患患者のQOL向上に関する研究班平成13度班会議,東京,2001.12.
- 伊藤 道哉:ALS等神経難病在宅療養の諸問題,平成13年度宮城県神経難病医療連絡協議会実地研修会,仙台,2001.12.
- 伊藤 道哉:開示に向けての看護記録の書き方,平成13年度宮城県看護協会研修会,仙台,2001.12.
- 伊藤 道哉,山崎壮一郎,濃沼信夫:筋萎縮性側策硬化症患者の安楽死・緩和ケアに関する学生の意識,第39回,日本病院管理学会,東京,2001.11.
- 伊藤 道哉:神経難病地域支援システムの確立をめざして,平成13年度神経難病研修会,古川,2001.11.
- 伊藤 道哉:ALS等神経難病在宅療養の諸問題,平成13年度宮城県神経難病医療連絡協議会実地研修会,古川,2001.9.
- 伊藤道哉:家族性腫瘍患者のQOLと医療経済,第4回家族性腫瘍カウンセラー養成セミナー,家族性腫瘍研究会,兵庫,2001.7.

H.知的財産権の出願・登録状況

該当なし

厚生科学研究費補助金（特定疾患対策研究事業）
分担研究報告書

神経難病患者のＱＯＬ向上のためのインフォームドコンセントのあり方

分担研究者　清水 哲郎　東北大学大学院文学研究科教授

研究要旨

神経難病患者とその家族におけるインフォームドコンセントのあり方を検討する研究として、昨年度に引き続き、(1) 倫理学的視点からの理論的分析、(2) 個別の患者・家族および医療者への聞き取り調査およびコメディカルの意見を聴取することなどを通して、患者を全人的にサポートしようとする際の困難な点の洗い出しを平行して進めた。その結果、人工呼吸器を一旦装着した後の取り外しの可能性について、理論的には、延命治療の中止がもつ問題点の指摘、実践的には、装着するかどうかについて患者の意思が尊重されない場合も多い現状において「外す可能性」を論議することへの懸念が提示され、これについてどう考えたらよいかを検討した。また患者に実際に接するコメディカルの医師と患者・家族の間にある葛藤（例えば段階的告知を巡る問題など）が抽出され、「ケアする側のケア」の必要性を確認した。

A 研究目的

神経難病(ことに ALS)患者とその家族において、インフォームドコンセントが適切に成立していることは倫理的に必要であるのみならず、患者とその家族のＱＯＬという観点からも重要なポイントとなる。今後の見通しを得ることによって患者は今後の人生計画をより適切に立てることができるようになるからである。本研究はこの点で患者のＱＯＬを高める方策を立てることを目的としている。研究成果は現場の医療者にこの点についての基本的な指針を示すものとなろう。

B 研究方法

神経難病患者におけるインフォームドコンセントのプロセスに関して、神経難病に特徴的な問題点や留意すべき点を洗い出し、倫理面からそれらの点について検討を加える(例えば呼吸系に麻痺が及んだ際に人工呼吸器を付けるかどうかについての advance directive の問題等)。そこで本研究では、(1)想定される典型的状況に関する倫理学的視点からの理論的分析、(2)個別の患者・家族および医療者への聞き取り調査結果の分析を通しての問題点の洗い出し、の両面から行い、その上で両面を総合して検討を行う。

（倫理面への配慮）

聞き取り調査にあたって、相手の自発的協力とプライバシーに留意し、かつ結果のまとめや発表に際しても、これらが損なわれないように注意する。

C 研究結果

倫理面からの分析としては、人工呼吸器を装着した後に、これを外す選択が倫理的に認容される可能性について、理論的には、これが直近の死を結果することから、意図的な死の選択であるという指摘、実践的には、装着するかどうかについて必ずしも患者の意思が尊重されていない現状において「外す可能性」を論議することは、医療側ないしは家族の都合によって患者を早期の死へと導く結果になりはしないかとの懸念が提示された。また、聞き取り調査等により、実際に患者に接するコメディカルが、医療者、患者、家族の三者間での見解の違い、段階的告知に伴う予測不可能な点、患者側が希望する生活と支援する側の限界といった問題点を抱えていることが認められた。

D 考察

ことに患者と家族の利害が必ずしも一致しないことが、問題を難しくしている。人工呼吸器を外す可能性を掲げた場合に、「もうそろそろ頃合いだろう」と医療側と家族の合意が成り立ち、患者にとって不本意な死の選択になる虞がないとはいえない。また、外す理由となる患者の精神的苦痛は果たして耐えられないものであるかどうかという疑念も解決してはいない。その他、コメディカルが葛藤を感じる問題の相当部分は、患者と医療者、家族との利害の対立である。

E 結論

人工呼吸器を外す可能性をさらに検討する必要がある。これを認めるとした場合にも、無制限な適用を避けるための歯止めを設定する必要がある。また、患者、家族、医療者の利害の対立についてさらに分析して、標準的な解決策を見出すことや、「ケアする側をケアする」方策を立てる必要がある。

F 研究発表

1. 論文発表

清水哲郎　看護現場の臨床倫理—哲学の視点から（『インターナショナルナーシングレビュー』24-3: 86-92, 2001.5, 再録：JNR 日本版編集委員会編『臨床で直面する倫理的諸問題』, 日本看護協会出版部:86-92）

清水哲郎 看護管理と臨床倫理（看護管理　11-7: 526-530, 2001.7）

武藤香織、泉田信行、岩木三保、山田猛、吉良潤一 診療報酬の逓減制が神経難病患者の医療と看護に与える影響について—原価調査と ALS 患者・家族への聞き取りを通じて—
（日本難病看護学会誌 5-3 掲載予定）

北村弥生　ALS 患者に対する人工呼吸器に関わる情報提供のあり方—リハビリテーション専攻学生を対象としたシュミレーション調査（国立身体障害者リハビリテーションセンター研究紀要 21:13-17, 2000）

2. 学会発表

武藤香織、岩木三保（司会、問題提起、まとめ）第 60 回日本公衆衛生学会総会　自由集会地域支援のなかで、改めて神経難病の病名告知を考える—筋萎縮性側索硬化症（ALS）について—（2001 年 11 月 1 日開催）

G 知的所有権の取得状況

とくになし

厚生科学研究費補助金（特定疾患対策研究事業）
分担研究報告書

脊髄小脳変性症の臨床遺伝子検査の現状と問題点

分担研究者　中島　孝　国立療養所犀潟病院神経内科医長、臨床研究部病態生理室長

研究要旨

脊髄小脳変性症において、症状・身体機能の維持・向上やQOL向上の観点から遺伝子検査の臨床的な意味についての留意点をまとめ、診療における遺伝子検査の意義や重要性をまとめる必要がある。遺伝性脊髄小脳変性症の常染色体優性、常染色体劣性のものがあり、そのおおくは容易に末梢血採血によりDNA検査が可能である。遺伝診断に基づく詳細病名の必要性について、Barthel index, BIとInternational cooperative ataxia rating scale, ICARSのデータをしめした。詳細診断名を早期につけ臨床経過を追い、転帰を確定し、剖検することで、EBMに基づく診療モデルの妥当性が評価でき、適切な診療ガイドラインやクリティカルパスが作成できる。

A.目的

遺伝性脊髄小脳変性症（SCD）において、標準化した診療モデルとそれに対応したクリティカルパス（critical path 以下パス）を作成するためには、詳細病名に基づいて臨床データを評価・解析する必要があると思われる。このために臨床遺伝子検査が必要である。SCD において、症状・身体機能の維持・向上やQOL 向上の観点から遺伝子検査の臨床的な意味についての留意点をまとめ、診療における遺伝子検査の意義や重要性をまとめる必要がある。

B.脊髄小脳変性症（SCD）臨床におけるEBMと遺伝子検査の必要性

SCD の領域では診断法、治療法、リハビリテーション技術、緩和医療、看護・介護技術などのすべての分野においてEBMのI,IIレベルに基づく知見は乏しい。それは、SCD としての疾患単位の多様性がおおく遺伝子検査が導入される以前の臨床データは不十分である。

SCD は分類のための病名であり、実際には遺伝子診断に基づく詳細な診断名により、診断方法、合併症、介護度、予後が異なると考えられる。詳細な診断としては孤発性としてMSA (OPCA, SND, SDS)とCCAがある。遺伝性の常染色体優性として、SCA1,2,3,6,7,8,12,14, 17, DRPLAなどがあり、常染色体劣性として、ビタミン E 単独欠損性失調症、低アルブミン血症と眼球運動失行をともなう早発性失調症（EAOH)などがある。

SCD の遺伝子検査に基づく詳細な診断名の地域分布の偏りと有病率の著しい差が認められている[1)]。SCD のデータは地域に依存して母集団の差がおおきく臨床試験の結果は地域により一定にならない。したがって、詳細な診断名に基づいてデータを収集すべきと思われる。詳細な診断名を早期に診断できるアルゴリズムを確立することも必要である。

C.遺伝子診断と臨床評価のための評価尺度の利用の結果

遺伝子検査に基づく診療モデルを実証するためには、多施設で比較できる臨床評価尺度の標準化がまず必要である。小脳症状の評価スケール ICARS（International Cooperative ataxia rating scale）と日常生活動作の評価スケールであるBarthel indexの利用が有用だった[1,2)]。QOL評価スケールも必要だが、SCDに利用できるものは現時点ではない。ICARSは多施設の薬理試験を目標に作成されたが、薬剤臨床試験で有意差がでた薬剤がないことと標準化のための inter-rater reliability のデータがないこと、ICARS は感度や定量性が十分とは言えないことが問題である。

D.結論

SCD は詳細な診断名ごとに罹病率などの地域差が極めて大きい。また、遺伝子検査に基づく詳細な診断名ごとの重症度・介護度などの予後はまったく異なる。したがって、現時点では、SCD という大きな分類に対応する包括医療をおこなえる根拠はなく、診療モデルや評価尺度が不十分なまま DRG/PPS を行うことはまず不可能である。まず、SCD の診断確定のために遺伝子検査、MRI、SPECT検査をいれ、早期に詳細診断名を確定できるようにする必要がある。

詳細診断名を早期につけ臨床経過を追い、転帰を確定し、剖検に基づいて詳細な検討と積み重ねをすることで、SCD 領域で EBM を基にした診療モデルの妥当性の評価と診療ガイドラインやクリティカルパスが作成できると思われる。

E.文献

1. 湯浅龍彦、西宮仁、中島孝他、神経ネットワークで実施されるべき共同研究について、医療、Vol.55, No.2:65-72,2001.
2. 林恒美、中島孝、福原信義、マシャド・ジョセフ病における臨床症状と 123I－IMP SPECT 所見の評価について、臨床神経学、41, 9, 2001 (in press)
3. 渡部弘美、大野清、中島孝、制限酵素活性に及ぼすフェノールの影響、医学検査, Vol50, No 5, 669-672,2001.

厚生科学研究費補助金（特定疾患対策研究事業）
分担研究報告書

視線入力方式コミュニケーション装置の固視微動に関する研究

分担研究者　熊澤　良彦　　（株）島津製作所　医用技術部　主任技師

研究要旨
Head Mounted Display（以下、HMD）に視線入力機能を組み込んだコミュニケーション装置を用いた場合の固視微動の影響について評価研究を行なった。装置内蔵の時間的・空間的フィルター補正をOFFにして視線計測した場合にはウェーブレット変換解析から固視微動に起因すると考えられる 3.75～15Hz の雑音成分が観測され、上記補正ONにより雑音の大幅な低減効果が確認された。

A．研究目的

筋萎縮性側索硬化症（ALS）は、進行すると四肢が麻痺し筆記・発語が不可能となる神経難病であるが、知能、感覚および眼球運動は正常で、知的な創造活動は可能である。従来の意志伝達装置はスイッチ操作が困難になると使用できない等の問題がある。QOLを向上するために複雑な意志や多量な情報を伝達可能で、スイッチ操作が困難になっても継続して使用できる装置の開発が望まれており、眼球運動を利用した装置が期待されている。HMDに視線入力機能を組み込んだコミュニケーション装置を試作し、平成11年度に仕様性能、臨床的評価及び有用性を、平成12年度に改良による操作性の向上を報告した。眼球運動の分類の中で、特に固視微動は一点を注視している時に生じる細かな動きであり、視線入力の誤差要因となるので、今回は本装置を用いた場合の固視微動の影響と時間的・空間的フィルター補正の効果について評価研究を行なった。

B．研究方法

1．装置と主な仕様・測定条件

(a)視線入力コミュニケーション装置（EYE-COTOBA）

HMD：視野広さ 20°×15°、焦点距離 0.8m。　視線検出方式：瞳孔重心法。

時間的・空間的フィルター補正：ON（標準用）／OFF（実験用）。　視線データ座標範囲：　(X,Y) = (0,0)～(639,479) Typ.

(b)RS-232C モニタ（安藤電気製プロトコルモニタ AE-5130＋AE-5940）　EYE-COTOBA の視線データを受信、記録。

2．被検者と計測手順

健常者男性4名（51.3±8.7才）。HMDを装着し、キャリブレーション後の画面にて中心と四隅の指標点5ヶ所を順次3～4秒注視して視線データを計測した。

3．視線データの解析方法

X、Y の各成分に対してウェーブレット変換を用いて時間周波数解析を行った。

（倫理面への配慮）

（平成11年度の臨床的評価に関する研究報告書を参照。）

C．研究結果

時間的・空間的フィルター補正 OFF の状態で計測したデータの場合、ウェーブレット変換による周波数分解データで、注視時においてレベル1（15Hz）～レベル3（3.75Hz）の詳細成分に微細な雑音成分が観測された。雑音の度合いは個人差によって異なった。上記補正 ON の状態では雑音の大幅な低減が確認された。

D．考察

固視微動はトレマー、ドリフト及びマイクロサッカードの3種類に分けられ、トレマーは視角 5～15″ 程度で周波数 10～200Hz、ドリフトは視角 2～5′ 程度で速度 4′/sec 程度との報告があるが、他に視角 1～5′ 程度で周波数 2～5Hz の遅いランダムな微動成分の報告もある。今回観測された 3.75～15Hz の雑音成分も固視微動に起因すると考えられる。

E．結論

本装置を用いて時間的・空間的フィルター補正 OFF で視線計測した場合に、固視微動に起因すると考えられる 3.75～15Hz の雑音成分が観測された。上記補正 ON により雑音の大幅な低減効果が確認された。

厚生科学研究費補助金（特定疾患対策研究事業）
分担研究報告書

在宅人工呼吸療法中のＡＬＳ患者のケアに関する研究

分担研究者　近藤　清彦　公立八鹿病院神経内科部長

研究要旨　人工呼吸器装着中の ALS 患者の QOL 向上と介護者の負担軽減が問題となっている。今回、ALS 患者に対する音楽療法の有効性を検討し、在宅人工呼吸療法中 ALS 患者の妻の介護疲労調査を行った。人工呼吸器装着ＡＬＳ患者への音楽療法は日々の葛藤を緩和する精神的ケアができ、身体的苦痛も取り除けた。音楽療法が難病患者への精神的ケアとして広く施行されるために、音楽療法士の国家資格化と音楽療法の保険点数化の早期実現が望まれる。在宅人工呼吸療法中の ALS 患者の介護者の負担軽減には、吸引ができるヘルパーか看護婦の夜間滞在によるケアが必要である。

A. 研究目的

人工呼吸器を装着した ALS 患者の QOL 向上と介護者の負担軽減の問題はなお課題として残っている。今回、QOL 向上をめざして、ALS 患者に対する音楽療法の有効性を検討した。また、在宅人工呼吸療法実施中の４名の ALS 患者の妻の介護疲労調査を行った。

B. 研究方法

四肢麻痺で人工呼吸器装着中の ALS 患者に対し、ベッドサイドに電子ピアノを運び、音楽療法士が１対１の音楽療法のセッションを行った。週に１回、６週のセッションを２クール施行した。介護疲労調査は、在宅人工呼吸療法実施中の患者宅へ看護婦が訪問し、主婦用蓄積的疲労徴候調査票（CFSI-H）により介護疲労の内容を分析した。

（倫理面への配慮）

患者のプライバシーを尊重し、顔写真を使用する場合は了解を得た。

C. 研究結果

音楽療法により、患者が自分の内面を吐露でき、カタルシスを図れた。職員・他の入院患者とコミュニケーションが図れ、介護者の精神的ケアにも有用であった。

介護疲労はマンパワー不足と夜間の睡眠障害が大きな要因であった。

D. 考察

人工呼吸器装着ＡＬＳ患者への音楽療法は日々の葛藤を緩和する精神的ケアができ、身体的苦痛も取り除ける。

介護者の疲労軽減には、在宅支援をさらに強化することと、レスパイト入院が安心してできる病棟の受け入れ体制整備が必要である。

E. 結論

音楽療法が難病患者への精神的ケアとして広く施行されるために、音楽療法士の国家資格化と音楽療法の保険点数化が必要である。

在宅人工呼吸療法中の ALS 患者の介護者の負担軽減には、吸引ができるヘルパーか看護婦の夜間滞在によるケアが必要である。

F. 健康危険情報

音楽療法には健康を害する副作用はみられなかった。

G. 研究発表

1. 論文発表

神経内科診療の現状とニーズ　地域の医療機関において（在宅医療を含む）　臨床神経学　40(12):1305-1307,2000

2. 学会発表

筋萎縮性側索硬化症(ALS)患者の在宅ケア－在宅人工呼吸療法 20 例のまとめ
第 38 回日本リハビリテーション学会総会
2001.6.14

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし

平成13年度 特定疾患対策研究事業

研究成果の刊行に関する一覧表

（書籍）

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書 籍 名	出版社名	出版地	出版年	ページ
Yasuda M, Takamatsu J, Komure O, Kuno S, D' Souza I, Kawamata T, Hasegawa M, Iwatubo T, Poorkaj P, Goedert M, Schellenberg GD and Tanaka C	Tau mutations altering splicing of tau exon 10 in Japanese frontotemporal dementia	C. Tanaka, PL McGeer, Y. Ihara(eds).	Neuroscientific Basis of Dementia	Birkhäuser Verlag	Basel/Switzerland	2000	
久野貞子	アテトーシス、ジストニー、片側バリスム		今日の治療指針2001	医学書院		2001	244-245
伊藤道哉	家族性腫瘍患者のQOLと医療経済		第4回家族性腫瘍カウンセラー養成セミナー講演集	家族性腫瘍研究会		2001	78-80
濃沼信夫; 伊藤道哉	先生，私の治る見込み（医師の治療仮説）はどうですか？，予後を見通	田村康二編	ハムレットの治療学	永井書店		2001	129-139
伊藤道哉〔分担執筆〕	日本病院管理学会	情報・用語委員会 編	医療・病院管理用語事典〔改訂版〕	エルゼビアサイエンス・ミクス		2001	
近藤清彦	ALS患者の在宅ケア	田城孝雄	在宅医療ハンドブック	中外医学社	東京	2001	314-325
小倉 朗子、他	筋萎縮性側策硬化症療養者の嚥下障害看護に関する研	日本難病看護学会	日本難病看護学会誌 6(1)	日本難病看護学会	東京	2001	68
水野優季、小倉朗子	ALS患者へのNIPPV導入時の看護に関する検討	日本難病看護学会	日本難病看護学会誌 6(1)	日本難病看護学会	東京	2001	63

平成13年度 特定疾患対策研究事業

研究成果の刊行に関する一覧表

（雑誌）

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Nishimura M, Mizuta I, Mizuta E, Yamasaki S, Ohta M, Kaji R, Kuno S	Tumor necrosis factor gene polymorphisms in patients with sporadic Parkinsons's disease	Neuroscience Letters	311	1−4、	2001
Mizuta I, Ohta M, Ohta K, Nishimura M, Mizuta E, Kuno S	Riluzole stimulates nerve growth factor, brain-derived neurotrophic factor and glial cell line-devived neurotrophic factor synthesis in cultured mouse astrocytes	Neuroscience Letters	311	117-120	2001
Nishimura M, Kawakami H, Maruyama H, Izumi Y, Kuno S, Kaji R, Nakamura S	Influence of interleukin-1β gene polymorphism on age-at-onset of spinocerebellar ataxia 6(SCA6) in Japanese patients	Neuroscience Letters	311	128-130	2001
Mogi M, Togari A, Kondo T, Mizuno Y, Kogure O, Kuno S, Ichinose H, Nagatsu T	Glial cell line-derived neurotrophic factor in the substantia nigra from control and parkinsonian brains	Neuroscience Letters	311	179-181	2001
Mizuta I, Nishimura M, Mizuta E, Yamasaki S, Ohata M, Kuno S	Relation between the high production related allele of the interferon-γ(IFN-γ)gene and age at onset of idiopathic Parkinsons's disease in Japan	J. Neuro. Neurosurg. Psychiat	71(6)	818-819	2001
久野貞子	パーキンソン病とパーキンソン症候群	老年精神医学雑誌	12巻4号	339-342	2001
久野貞子	パーキンソン病と悪性症候群	パーキンソン病を考える。SCOPE	別冊	32-33	2001
山崎俊三、久野貞子	ふるえの発生機序	治療	83,No.6	79-83	2001
久野貞子	長期治療のストラテジー。(特集:高齢者のパーキンソン病治療)	GERONTOLOGY	13	46-50	2001
久野貞子	症例報告 進行性パーキンソン病患者の治療(パーキンソン病長期治療の問題点と対策—ドパミンアゴニストの役割—	GERONTOLOGY	13No.2	91-93	2001
久野貞子	薬の使い方について 第42回日本神経学会総会 サテライトシンポジウム パーキンソン病長期治療の戦略	Pharma Medica	19No.8	120-123	2001
福永秀敏	パーキンソン病などの神経筋疾患	医学書院	29	715-718	2001
福永秀敏	ホームヘルパーをとりまく諸問題	日本医事新報	4006	60-62	2001
園田至人、久保裕男、福永秀敏	介護保険とパーキンソン病	メディカルレビュー社	13	79-84	2001

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
小森哲夫、三明裕知、道山典功	神経筋疾患における呼吸不全の包括的治療—筋萎縮性側索硬化症を中心に—	MB Med Reha	7	42-48	2001
道山典功、小森哲夫	神経筋疾患における呼吸リハビリテーション—理論と基本手技;筋萎縮性側索硬化症を中心に—	MB Med Reha	7	49-52	2001
伊藤道哉	終末期におけるスピリチュアルな領域と宗教－研究動向をもとに－	緩和医療学	4(1)	13-21	2002
伊藤道哉	新しい遺伝子検査ガイドラインにおける遺伝情報の取り扱い	クレコンレポート	23	1-7	2001
伊藤道哉、関本聖子	人を動かすのは情報 情報を活性化させるのは対話～宮城県神経難病医療連絡協議会におけるコーディネートの実際～	ヘルスカウンセリング	4(3)	37-45	
伊藤道哉	書評『ヒト・クローン無法地帯』	ナースマネジャー	2(10)	4	2000
伊藤道哉	書評『医療経営白書』	ナースマネジャー	2(11)	4	2001
伊藤道哉	書評『看護記録のゆくえ「看護記録」から「患者記録」へ』	ナースマネジャー	2(12)	4	2001
伊藤道哉	書評『効果的な情意教育の展開』	ナースマネジャー	3(1)	4	2001
伊藤道哉	書評『人は誰でも間違える』	ナースマネジャー	3(2)	4	2001
伊藤道哉	書評『病院看護の通信	ナースマネジャー	3(3)	4	2001
伊藤道哉	書評『高齢期の健康科	ナースマネジャー	3(4)	4	2001
伊藤道哉	書評『導入対話による医事法論議』	ナースマネジャー	3(5)	4	2001
伊藤道哉	書評『僕はやっていない！仙台筋弛緩剤点滴混入事件 守大助勾留日	ナースマネジャー	3(6)	4	2001
伊藤道哉	書評『医療・病院管理用語辞典【改訂版】』	ナースマネジャー	3(7)	4	2001
伊藤道哉	書評『葉っぱのフレディーいのちの旅』	ナースマネジャー	3(8)	4	2001
伊藤道哉	書評『厚生労働白書 平成13年版』	ナースマネジャー	3(9)	4	2001
伊藤道哉	書評『化学・生物兵器概論－基礎知識』	ナースマネジャー	3(10)	4	2002
伊藤道哉	書評『コミニュケーション・スキルに関する書籍の紹	ナースマネジャー	3(11)	4	2002
近藤清彦	神経内科診療の現状とニーズ 地域の医療機関において(在宅医療を含	臨床神経学	40(12)	1305-1307	2000
湯浅龍彦、西宮仁、中島孝、川村潤、松井真、木村格、川井充	神経ネットワークで実施されるべき共同研究について	医療	第55巻 第2号	65-72	2001
川井充、中島孝、湯浅龍彦	神経・筋ネットワークにおけるcreutzfeldt-Jakob病入院診療の現状と問題点	医療	第55巻 第10号	516-519	2001
中島孝、亀井啓史	統計学的脳血流SPECTを用い、鑑別診断の有用性を検討したパーキンソニズムの2例	臨床と薬物治療	Vol.20 No.7	740-744	2001

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Fukutake T, Kamitukasa I, Arai K, Hattori T, Nakajima T	A patient homozygous for the SCA6 gene with retinitis pigmentosa. Clin Gent				in press
渡部弘美、中島孝、大野清	制限酵素活性に及ぼすフェノールの影響	医学検査	VOL50 NO.56	669-672	2001
福原信義	神経難病の緩和医療。	緩和医療学	3	45-52	2001
小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(10)、浴室(3)改造例。	難病と在宅ケア	6(11)	69-73	2001
服部千秋、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(11)、台所	難病と在宅ケア	6(12)	62-64	2001
湯浅龍彦、中島孝、川村潤、西宮仁、松井真、木村格、川井充	神経ネットワークで実施されるべき共同研究について。	医療	55	65-72	2001
服部千秋、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(12)、台所	難病と在宅ケア	7(1)	70-73	2001
小林淳子、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(13)、食事(1):食堂改造および食堂用自助具。	難病と在宅ケア	7(2)	68-71	2001
小林淳子、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(14)、食事(2):姿勢と上肢・手指機	難病と在宅ケア	7(3)	62-65	2001
小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(15)、寝室(1):ベットと寝具類、付属	難病と在宅ケア	7(4)	61-65	2001
小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(16)、寝室(2):ギャジベット、周辺機器、改造例。	難病と在宅ケア	7(5)	85-89	2001
宮下八重子、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(17)、リフト(1)、種類と特徴。	難病と在宅ケア	7(6)	35-38	2001
中島孝	実用モデル「愛言葉」の誕生。視線入力意思伝達装置の科学と哲学。	難病と在宅ケア	7(7)	15-19	2001
宮下八重子、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(18)、リフト(2)、導入した事例。	難病と在宅ケア	7(7)	39-42	2001
小出隆司、福原信義	人工呼吸療法:現況と今後の展望。	難病と在宅ケア	7(7)	51-55	2001
小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(19)、ホームエレベーター、階段昇降	難病と在宅ケア	7(8)	29-33	2001
川井充、中島孝、湯浅龍彦	神経・筋疾患政策医療ネットワークにおけるCreutzfeldt-Jakob病入院診療の現状と問題点。	医療	55	516-519	2001
林恒美、中島孝、福原信義	マシャド・ジョセフ病における臨床症状と^{123}I-IMP SPECT所見の評価について。	臨床神経	41	574-581	2001
小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(21)、福祉用	難病と在宅ケア	7(10)	69-73	2002
高津由子、小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(22)、住宅改修と福祉用具を利用するための社会資源。	難病と在宅ケア	7(11)	23-26	2002
小林量作、福原信義	在宅神経難病患のための住宅改造(最終回)、住環境整備の目的とその効	難病と在宅ケア	7(12)	54-58	2002

20010854

「研究成果の刊行に関する一覧表」

私の選んだ常備薬　抗てんかん薬.
中島孝, 木村一恵, 野村芳子, 瀬川昌也
臨床と薬物治療, 19 巻 10 号 Page1056-1057, 2000.

Cerebral lateralization of the human color center as revealed by functional MRI.
Nakajima T. Kobayashi Y. Fukuhara N.
Ultrafast magnetic resonance imaging in medicine : proceedings of the International Symposium on Ultrafast Magnetic Resonance Imaging in Medicine, Kyoto, Japan, 27-29 January 1999.
Edited by Shoji Naruse and Hiroshi Watari. pp.173-175. Elsevier, 1999

けいれん発症のメカニズム　細胞内でのシグナル伝達.
中島孝
小児内科, 31 巻 4 号, Page433-438, 1999.

神経内科領域での医療情報システム活用.
中島孝
臨床医, 25 巻 4 号, Page445-450, 1999.

鑑別すべき特殊な小脳失調症　MERRF.
中島孝
Clinical Neuroscience, 17 巻 4 号, Page443-455, 1999.

神経ネットワークシリーズ　筋強直性ジストロフィーを合併した脊髄小脳変性症.
重松一生, 杉山博
医療, 55 巻 10 号, Page520-522, 2001.

第1章　難病入門
第2章　難病の基礎知識Ⅰ
第3章　難病の基礎知識Ⅱ
第4章　難病患者の心理及び家族の理解
第5章　難病患者の心理学援助法
第6章　難病患者の介護の実際

難病患者等ホームヘルパー養成研修テキスト. 改訂第４版
厚生省特定疾患患者の生活の質(QOL)の向上に関する研究班・疾病対策研究会　監修, pp.6－57, 社会保険出版社

20010854

以降のページは雑誌/図書等に掲載された論文となりますので、
「研究成果の刊行に関する一覧表」をご参照ください。